



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『戦争と平和』にあらわれたロシア・フリーメンスン
Author(s)	笠間, 啓治; Kasama, Keiji
Citation	スラヴ研究, 42, 41-59
Issue Date	1995
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5233">https://hdl.handle.net/2115/5233</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113387.pdf



# 『戦争と平和』にあらわれた ロシア・フリーメイスン

笠 間 啓 治

## 00. 問題提起

トルストイの小説《Война и мир》(1863-69)は、1805-12年のロシア社会をめぐる歴史的動乱を扱っていると同時に、このような歴史のうねりの中で生きたロシア・インテリゲンチヤの精神的苦悩と魂の遍歴をテーマにしている。小説の主人公 Пьер は、煩悶から脱け出さんとして、その第一歩をフリーメイスンとしての活動の中に見出す。そして、フリーメイスン結社の中で Пьер は精神的に大きく成長していく。この過程は、小説《Война и мир》の重要な柱の一つとなっている。

また、《Война и мир》の舞台になっている19世紀初頭のロシアはフリーメイスンの活動のもっとも盛んな時期に当たっていた。この時期のロシアを描写するには、フリーメイスンの要素を抜きにしては考えられない。それは、風俗的流行という側面の他に、18世紀以来のロシア思想の展開にとって一つの頂点を反映するものであった。啓示による直観的な真理探求という神秘思想特有のこの傾向は、多くのまがいものを生んだにもかかわらず、当時のロシア・インテリゲンチヤを強く魅惑した。その後のロシア思想の潮流においても、フリーメイスンが落した思想的種子はやがてロシア独自の思潮へと展開していった。

以上の二つの意味において、小説《Война и мир》を論ずるに際しては、フリーメイスンに関する考察は欠かせない要素であり、事実、作者トルストイはこの時期のロシア・フリーメイスンの実態を把握せんとして、少なからざる努力を払い、小説における形象化の試みになったと考えられる。ところが、今までの《Война и мир》研究においては、フリーメイスンの要素はごく付随的な現象の如く取扱われる場合がほとんどであった。時には考察の対象からまったく除外するということさえあった。また、前世紀以来、ロシア・フリーメイスンの史学的研究は書架に充満しているにもかかわらず、19世紀初頭のロシア社会を舞台にしている小説《Война и мир》の考察では、主人公である Пьер の精神的成長というまったくの個人的な枠内にフリーメイスンの要素を限定する傾向が強い。

以上のような欠落の補完のため最初になすべきは、小説《Война и мир》の登場人物群の中でどれがフリーメイスンであったかという客観的事実関係をまず明かにしておくことであろう。それは、風俗描写への指摘であると同時に、この小説の中に隠されたいわば思想的底流を知るための前提的作業と言えるかもしれない。19世紀初頭のロシア社会の実態を明かにする上からも、また作者トルストイの創作意図を知るためにも、この小説におけるフリーメイスンの側面の解明は不可欠な作業となるであろうし、またトルストイ主義と言われている独自の思想の根元の解明にも繋ってくるであろう。

なお、本論文においては、トルストイからの引用は、

Толстой, Л.Н. *Полное собрание сочинений в 90 томах* (Юбилейное издание), М.-Л., 1928-58.

に依拠し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示した(例：XII, 320)。また、小説《Война и мир》については、時に応じ、小説の巻・章・節を т. 2, ч. 3, XI の如く示した。

## 01. Осип (Иосиф) Андреевич Баздеев

小説《Война и мир》では、主人公の Пьер は妻の不貞をめぐって決闘騒ぎの末に自己嫌悪に陥っているとき、旅の途中、Торжок の駅舎にて、一人の老人に声をかけられ、フリーメイソンの理想を聞かされる (т. 2, ч. 2, II)。こうして、Пьер はこの老人の人格に魅了され、急速にフリーメイソンに傾斜していく。この時の老人を紹介して、トルストイは、

Баздеев был одним из известнейших масонов и мартинистов еще новиковского времени. (X, 72)

と書いている。この人物が Осип Андреевич Поздеев (Паздеев) (1742-1820)<sup>(1)</sup> をモデルにしていることは、研究者が例外なく認めるところであり<sup>(2)</sup>、事実、トルストイは初期の構想の一つで、仮定の名前ではなくて、実在の O.A. Поздеев を出している。

Pierre приходит к Паздееву. Паздеев строго учит его — грязная квартира.

とあって、Пьер の方から O.A. Поздеев のところへ赴き、フリーメイソンに関して教えるを仰ぐことになっている (XIII, 23-24)。後に、この部分を形象化するに当って、Иван Никитич Нарымов という架空の名前を用いたり (XIII, 643)、たんに старик と書いて、別のシチュエーションにおいては両者が出会う場面を試みたりしている<sup>(3)</sup>。そして、決定稿に至って、O.A. Баздеев となったのであるが、これが O.A. Поздеев という史上有名なフリーメイソンであることは、特別の注釈を施さずともこの小説の発表当時 (1868 年) のロシアの読者には上記のような短かな説明だけで十分了解されたはずである。だが、それから 130 年後の今日の読者には、とくに日本の読者には、この固有名詞 O.A. Поздеев はたんに登場人物の一人を指示するだけのものにすぎず、この名前から実在の人物の思想や経歴を悟ることは、まずありえないと言い切ってもよいかもしれない。換言すれば、19 世紀初めのロシア社会において隠然たる権威を保持していたこのフリーメイソンの長老は、20 世紀末の日本の読者には、もはやその実態の把握が不可能であり、その氏名さえ何の内容も含まないまったくの記号に等しいものになっているのである。しかし、少なくともトルストイがこの小説を執筆した 19 世紀 60 年代は、この O.A. Поздеев を含めてロシア・フリーメイソンへの関心が高まりつつある時期であった。したがって、Н.И. Новиков を初めとする 18 世紀以来のフリーメイソンとの表現でその実態を伝えることができたし、この部分で用いられている мартинист だけで、これらの説明は可能であった。ロシアにおける мартинист というテーマの論議は別の機会に譲るが、ここでトルストイが提示している мартинист とは 18 世紀以来のロシア・ローゼンクロイツェルに他ならないことをまず強調しておかねばならない。それは 18 世紀 80 年代にドイツからロシアのフリーメイソンへもたらされたきわめて

特異な中世神秘思想であり、その継承者 Н.И. Новиков によって独自の展開をとげ、ロシア・ローゼンクロツェルの伝統となる。中世が生んだこの形而上学的思考方法は、18世紀ロシア思想界を席卷したと言っても過言ではない。というより、まったくの無菌状態のロシアにて異常繁殖したと表現してもよいだろう<sup>(4)</sup>。

その後、1794年、Екатерина II によってフリーメイスンの活動が禁止され、中心人物 Н.И. Новиков が逮捕・監禁されたけれども、その血統は脈々として生き続けて、19世紀を迎えたのであった。もっとも、Н.И. Новиков は田舎に引退し、新しい世代のフリーメイスン活動には直接参与せず<sup>(5)</sup>、19世紀初頭のフリーメイスン再興期を迎えたとき、ローゼンクロイツェル系フリーメイスンの長老として活動の中心に座ったのが О.А. Поздеев であった。とりわけ、モスクワではローゼンクロイツェルの伝統は濃厚に保持された。その中において О.А. Поздеев はもっとも権威ある存在となり、святой と呼ばれるほどであったという<sup>(6)</sup>。

Пьер が加入したのは以上のような性格のフリーメイスン結社であったことを、まず強調しておかねばならない。この頃からようやく普及してきたフランス系のリベラルなそれではなかった。新しい世紀のフリーメイスンの動き全体からすれば、ある意味ではかなり特異な一派であったと言ってもよいだろう。作者トルストイはあえてこのような特殊なシュチュエーションを選択的に取り出してきているわけである。このような特殊ともいえる側面だけをもつばら描写の対象にしたということは、ロシア・フリーメイスンの真髓がローゼンクロイツェルの人たちにおいてもっとも典型的に具体化されていると、トルストイ自身考えていたことを物語っている。後述するように、トルストイは19世紀初頭の現実のうちの多くの部分を削除することによって、自分の姿勢を間接的に鮮明化し、自分との思想的共鳴を示さんとしたのであった。

なお、小説では、И.А. Баздеев はナポレオン戦争以前に、つまり1812年よりも前に死去していて、Пьер はこの恩師の邸に残る遺産（フリーメイスン関係の道具や書類）を管理することになっている。そして、この邸においてフランス軍を迎える（т. 3, ч. 3, XXVII—XXIX）。だが、О.А. Баздеев のモデルである実際の О.А. Поздеев はこの時点ではいまだ生存しており、Вологда の自分の領地にて生活していた。死去したのは、ナポレオン戦争よりはるか後、1820年であった。

また、小説では О.А. Баздеев の邸は Патриаршие пруды の畔り、つまり、モスクワの中心である。これに対し実際の О.А. Поздеев が住んでいたのはモスクワの北のはずれ、Красные пруды の近くであった<sup>(7)</sup>。いずれも水の近くであり、何らかの寓意が隠されているようである。

## 02. Пьер (Петр Кириллович Безухов 伯爵)

フリーメイスンとしての Пьер のモデルに関しては、すでに別の論文にて詳述したので<sup>(1)</sup>、繰り返さない。ここではただ若干の注釈を補充するにとどめる。

1806年に Пьер はペテルブルグにおいて ложа Ищущих Манны に加入したとされている（X, 296）。しかし、この ложа が創設されたのは、それよりも10年以上も後、1817年

のことであり、しかもペテルブルグではなくモスクワにおいてであった<sup>(2)</sup>。また、*ложа Астрея*との対立に触れているが(X, 296)、こういったフリーメイソン組織の分裂は1811年ではなく、1816年であり、いずれも周知の事実であった。トルストイの虚構はいずれも事実からほど遠いと言わざるをえない。作者によるこのような誤記は、不注意と言うよりも、むしろ一種の韜晦と考えられる。当初の案によれば、Пьерが加入したのは *ложа Северного сияния* となっているが<sup>(3)</sup>、この名称もまたペテルブルグには存在しない。当時のフリーメイソンが思想的に依拠するところが多大であった神秘思想家の Jacob Boehme の主作品《Aurora》の題名の露訳 северное сияние にヒントを得たのではないであろうか。ちなみに、1817年創立の *ложа Северной Звезды* というのが Вологда にあったが<sup>(4)</sup>、O.A. Поздеев の領地もこの Вологда であって、ここに住んでいたこととも関連しているかもしれない。

ちなみに、小説の題名《Война и мир》の мир が、「平和」の意味であるか、「現世」の意味であるかについて諸説あることは、よく知られているところだが、後者の仏訳の一つに l'univers があり、それは Пьер のフリーメイソンの世界を示すとの解釈がなされていることを指摘しておきたい<sup>(5)</sup>。

### 03. Андрей 公爵(князь Андрей Николаевич Болконский)

小説のもう一人の主人公 Андрей 公爵については、フリーメイソンであるとの直接的な指示は何もない。しかし、トルストイがこの Андрей 公爵をフリーメイソン結社に結びつけていたと思われる証拠がいくつか存在している。たとえば、未定稿にそれをうかがわせる語句が発見される。構想の段階で、

К[нязь] А[ндрей] в ложе, речь ……

К[нязь] А[ндрей] ……Он библейскому обществу принадлежит…… (XIII, 23)

とあり、また、

Ложа, где к[нязь] А[ндрей] ищет илюминатство. (XIII, 24)

との構想があったし、Пьер の紹介で Андрей 公爵がフリーメイソンに入るとの設定も試みられた (XIII, 704-705)。また、

Последнее заседание, вместе с Андреем, Шотландской столовой ложи, улыбка князя  
Андрея при обрядных словах закрытия…… (XIII, 799)

といったシチュエーションも構想され、そこでは Андрей 公爵がフリーメイソンの会合に出席している。このように、Андрей 公爵がフリーメイソンに属していたとのシュゼットが用意されていたのであるが、最終稿ではこれらの部分はいずれも具体化しなかった。しかし、Андрей 公爵がフリーメイソンであるとの性格付けは小説の底流において残ったと考えてよい。たとえば、この設定は最終稿の次のような状況と繋っている。Андрей 公爵が Пьер に向かって、

— Мне надо, мне надо поговорить с тобой, — Ты знаешь наши женские перчатки (он говорил о тех масонских перчатках, которые давались вновь избранному брату для вручения любимой женщине). Я……Но нет, я после поговорю с тобой. (X, 217)

と言う。ここで二人は масонские перчатки について語る。二人は наши であり、お互い брат である、つまり共にフリーメイソンであるとの設定が行われているわけである。したがって、Пьер がフリーメイソンとなった後、Андрей 公爵の領地を訪問したときの有名な議論も (т. 2, ч.2, XI—XII)、二人が同じ理想を共有する同志であるとの前提の下での論争であることを知っておかねばならない。たとえば、Helder<sup>(1)</sup> の名が出てくるが、それはフリーメイソンとしてのそれであることは明かである。

このように、構想の段階で作者は Андрей 公爵をフリーメイソンと設定していたのであろうが、後にその設定を撤回しようとしたものの、フリーメイソンの痕跡は各所に残ったと解釈できるであろう。Александр Иванович Михайловский-Данилевский (1790—1848) を Андрей 公爵のモデルに上げる研究者がいる<sup>(2)</sup>。たしかに両者は共通点を有しており、Аустерлицの戦いでも、Бородино の戦いでも、М.И.Кутузов 総司令官の副官として А.И. Михайловский-Данилевский は参加しており、自分の目を見たこれらの戦闘の経過を史書としてまとめ<sup>(3)</sup>、トルストイもそれらを利用したとされている (XVI, 142)。ところが、小説には、М.И. Кутузов 将軍の幕僚の登場があまたあるが、この А.И. Михайловский-Данилевский の名前は出てこない。すなわち、この人物が小説の登場人物の一人のモデルとなったことの傍証となる。ナポレオン戦争後、ロシア軍がパリに入城した際、この人は Н. И. Тургенев とともにフリーメイソンに加入したと言われる<sup>(4)</sup>。Андрей 公爵の形象化に際して、トルストイはそういった知識に影響を受けたと考えてよいであろう。

#### 04. 老公爵(князь Николай Болконский)

Андрей 公爵の父親は、前世紀に皇帝の忌避にあつて、領地に引退し、かなり偏屈な老人ということになっている。だが、かつては А. Суворов 将軍の下で勇猛をもって鳴らした人物であり、後述する М.И. Кутузов 将軍とは古い戦友であった。これらの将軍がいずれもフリーメイソンであることを<sup>(1)</sup> まず指摘しておきたい。А. Суворов 将軍の指揮の下にロシア軍が外征した際に、Болконский 老公爵もまた、外国にてフリーメイソンになったとの設定がなされているのではないだろうか。そのように考えてみると、Андрей 公爵がこの父親 Болконский 老公爵の推薦状をもってオーストリー遠征ロシア軍総司令官の М.И. Кутузов 将軍の前に出たとき、将軍の喜びようは尋常ではなく、他の副官たちとは別扱いしている (т. 1, ч. 2, III)。最初から絶対的な信頼を示しているのは、古い戦友の子息であるという事情からであろうが、たんにそれだけではないだろう。精神的な共通項を持つ者に特有の絶大なる信頼感が先行している。

1810 年、Болконский 老公爵はモスクワに出てきて、自分の名の日 (聖ニコラ祭) のお祝いに客を招待する。名士である老公爵の邸にはモスクワの政官界の有力者が押し寄せたが、老公爵はそういった世俗の有名なたちを排斥して、6 名だけを正餐に招くことにした (X, 303)。すなわち、モスクワ総督の Ф.В. Растопчин 伯爵、Лопухин とその甥、かつての戦友の Чатров 将軍、そして Пьер と Борис である。Ф.В. Растопчин 伯爵については後述することとし、Лопухин とあるのは、В.И. Лопухин と考えられており (XII, 458)、前世紀からのフリーメイソンの有力者であったことに注目したい(後述)。そして、既述のように、Пьер

は数年前にフリーメイソンに加わっており、この方面では活発な運動を行っていた。また、その Пьер の推薦によって、Борис Друбецкой はその少し前にフリーメイソン結社に加わっている (X, 180)。Чатров 将軍というの是不明だが、老公爵と共に А. Суворов 将軍の下で старый боевой товарищ であり、そういう意味ではまた 18 世紀以来のフリーメイソンであるとの設定が隠されているとも考えられる。

Ф.В. Ростопчин 伯爵を除き客人がフリーメイソンであり、老公爵の強い意向によって招かれたことになっている。Болконский 老公爵としては、心おきなく語り合えるのは、そういった共通の理想を抱いている同志だけであったとの設定と考えるべきであろう。

### 05. Иван Владимирович Лопухин(1756—1816)

Болконский 老公爵の名の日の祝いに招かれた 6 名の客の一人に Лопухин の名前が現われる。ロシア貴族で Лопухины 公爵家といえば、名家で知られていて、数多くの人材がロシア史に出てくる。だが、ここの Лопухин は爵位を有せず、おそらく И.В. Лопухин であろうと考えられている (XII, 458)。この人物が 18 世紀末において Н.И. Новиков につらなる ローゼンクロイツェル系フリーメイソンの有力者であることは、あらためて紹介するまでもないだろう。たとえば、ロシア人物事典はこの人物に 33 ページを捧げるといった破格の扱いをなしていることを指摘しておこう<sup>(1)</sup>。つまり、ロシア史を飾る最重要人物の一人と見ているわけで、このような意味で、Лопухин という固有名詞から以上の知識を連想するようトルストイは求めていると言えよう。したがって、トルストイがこの著名のフリーメイソンをわざわざ登場させているのは何故か、この点の問題提起を従来のトルストイ研究者がなしていないのは、奇怪と言わざるをえない。また、それに対する明確な回答を出すことが、今後の《Война и мир》研究の課題となるであろう。

小説の中でこの人物の名前が出現するのは、この場面だけであり、しかも何一つ発言しないまま、視界から去っていく。現代のわが国のほとんどの読者はこの固有名詞に注意を払うこともなく、物語の展開を追いかけるであろう。しかし、トルストイはこの何気ない叙述によって読者に多くのことを要求していると言わざるをえない。というのは、トルストイが小説《Война и мир》の執筆にかかる少し前 (1860 年) に、この И.В. Лопухин の手記<sup>(2)</sup> が発表され、ロシアの知的分野での大きな話題となっていたからである。そして、トルストイも小説の執筆に当ってこのフリーメイソン И.В. Лопухин の手記を利用したとされている (XVI, 142)。また、この人物にはフリーメイソン関係の著述がまことに多く<sup>(3)</sup>、それらは Румянцев 博物館などで閲覧できたはずである。また、この人が残したノートや書簡もそこには保管されており、おそらく、トルストイが目を通した可能性は高いと言わねばならない。これらのことから想像するに、この人物の名前をここにわざわざ取り出しているのは、この Болконский 老公爵が И.В. Лопухин と思想的に深くかかわっていることを示すためであり、また、同じく老公爵がローゼンクロイツェルの一人であることを暗示していると言えるかもしれない。

この小説で、И.В. Лопухин は単なるエピソード的に扱われているが、この人が著作にて強調している внутренняя церковь (innern Kirche) という考え方、あるいは生き方は、そ

の後のトルストイの思想に大きな影響を与えていることを指摘しておかねばならない。その著述を一瞥しただけで、トルストイの宗教思想との相関を認めざるをえないし、トルストイ晩年における正教会との対決の姿勢とも深くかかわっていることもまた納得できるであろう。フリーメイスンというのは一種のトルストイ主義だとの主張が後の文学史家によってなされていることを指摘しておきたい<sup>(4)</sup>。今日のフリーメイスンは、時にはトルストイをその一員に算入するが<sup>(5)</sup>、こういった思想的背景によるものと思われる。

## 06. молодой польский граф Вилларский

小説《Война и мир》では、旅の途中、ПьерがИ.А. Баздеевよりフリーメイスンの理想を知らされた後、ペテルブルグに戻ると、一人の若いポーランド人の来訪を受け、この人物に導かれて、フリーメイスン結社に加入する(т.2, ч. 2, III)。その人の名前が、Вилларский伯爵となっている。Михаил Юрьевич Виельгорский伯爵(1788—1856)<sup>(1)</sup>がそのモデルであることは、どのトルストイ研究者も認めるところである。と言うよりもむしろ、作者のトルストイの方が、読者にこの実在の人物の氏名を思い出させようとして、登場人物の姓を実際と酷似のВилларскийに設定したのだと考えるべきであろう。

М.Ю. Виельгорский伯爵については、既に多くのことが明らかにされている。だが、その経歴のほとんどは、サロン主宰者・音楽家・芸術パトロンといった後年の活動に重点がおかれている。けれども、ロシア・フリーメイスンの歴史をひもどくとき、禁止令が出るまでの19世紀初頭のフリーメイスンの活動において、この人物の名は逸するわけにはいかないことを、ここで強調しておかねばならない。フリーメイスン活動家であった若き日のМ.Ю. Виельгорский伯爵を、トルストイは感慨をもって回想していたはずである。

ロシア・フリーメイスンの歴史において、М.Ю. Виельгорский伯爵の足跡はきわめて大きい。既述のО.А. Поздеевの絶大な信頼を受けて、その直接の指導の下、19世紀10年代に、ローゼンクロイツェル系フリーメイスン組織の展開のため、精力的な活動を行い、彼を中心にして、この系統の組織が急速に拡大していった。この人物はС.С. Ланскойと共に19世紀初頭のフリーメイスンの星であった<sup>(2)</sup>。たとえば、1810年には、ペテルブルグのложе Палестиныを主宰し<sup>(3)</sup>、翌年、ローゼンクロイツェル系フリーメイスン組織を統合するДиректориальная ложа Владимира к Порядкуが結成されるや、С.С. Ланскойと並んで、ここの中心に立って活動した<sup>(4)</sup>。

小説《Война и мир》では、この人物に対してトルストイはかならずしも肯定的な評価を与えていないし、どちらかと言えば、批判的に、時には揶揄的に描写しているようにも思える。だが、実際のМ.Ю. Виельгорский伯爵は、そのмягкий характерともからんで、その人格的な魅力によって多くの人々を惹き付け<sup>(5)</sup>、ローゼンクロイツェル系フリーメイスン組織の代表者となったのも偶然ではない。地方のロッジでこの人を名誉代表に仰ぐといった例<sup>(6)</sup>を知るとき、この人物の魅力は並々ならぬものであったと言わざるをえない。

ちなみに、小説のВилларскийのモデルは、М.Ю. Виельгорский伯爵の父親で、同じくフリーメイスンであったЮрий Михайлович Виельгорский伯爵(1753—1808)だとする見解がある<sup>(7)</sup>。しかし、小説の設定では、молодой польский граф(X, 73)ということになって

おり、Пьер のフリーメイソン入会の時点（1806年）ではこの人は53歳であり、とうてい「若い」とは言えず、今の場合のモデルにするわけにはいかないだろう。

### 07. 総司令官 Кутузов 将軍 (Святлейший князь Михаил Илларионович Голунищев-Кутузов-Смоленский)(1745—1813)

小説《Война и мир》の война の部分の主人公を М.И. Кутузов 将軍とすることには、異論はないであろう。М.И. Кутузов 将軍がもっぱら война の中でだけ登場し、しかもトルストイの全面的な肯定を背景にしてロシア国民の救済のヒーローとして描かれている。1805年には、ロシア軍総司令官 М.И. Кутузов 将軍の姿は小説の前半のハイライトをなしているし、後半においても、1812年のナポレオンのロシア侵入に際しては、ロシア軍を率いてナポレオンと死闘を展開し、その後、モスクワ放棄、そして反攻、フランス軍の壊滅といった展開は、読者に息をつかせない。そこにはロシアの民族的高揚を体現した（とトルストイは主張する）М.И. Кутузов 将軍がつねに控えている。読者はそういった武将としての М.И. Кутузов 将軍を知ることがあっても、実は前世紀からの熱心なフリーメイソンであったという事実には目を向けようとしなない。

18世紀末に А. Суворов 将軍に率いられてドイツの地にあったときに、М.И. Кутузов 将軍はフリーメイソンになり、その後、各地の ложа に迎えられ、高位にまで進んだという<sup>(4)</sup>。もちろんローゼンクロイツェル系統のそれであって、その意味では、この小説に描かれている思想的指導者 О.А. Поздеев につながる新しい世代のローゼンクロイツェル系フリーメイソンたちとも、相通ずるものを持っていると言える。

たとえば、Пьер は М.И. Кутузов 将軍とも知り合いであったことになっているが、それを示す具体的な状況は提示されていないし、説明もなく、突然、Бородино の戦いの前夜、観戦に来た文官服の Пьер を認めるや、М.И. Кутузов 将軍はきわめて好意的な対応をしている（т. 3, ч. 2, XX, XXII）。たんなる好奇心の強い有力者としてではなくて、フリーメイソンの活動家としての Пьер を迎えていると解釈すべきであろう。

### 08. Михаил Михайлович Сперанский 伯爵 (1772—1839)

小説では、Андрей 公爵が В. Кочубей 伯爵を訪れた際に、そこで初めて М.М. Сперанский 伯爵に会い（т. 2, ч. 3, XVIII）、強く惹き付けられるものを感じる。後に、М.М. Сперанский の私邸での内輪の集りに Андрей 公爵も招かれ、ロシア改革について議論を交わし、ますますその魅力に引き込まれる（т. 2, ч. 3, IV—VI）。トルストイは、その模様を子細に描写しているが、この時期のロシアの国内政治を実質的に動かしていたこの人物を取り上げることによって、мир の時期のヒーローを指摘しようとしていたとも言えるであろう。この時期のもう一人のヒーロー А.А. Аракчеев には、それが軍事関係の責任者であることもあって、トルストイは反対にまったく否定的に扱っている（т. 2, ч. 3, IV）。

この時期の М.М. Сперанский 伯爵は Александр I の絶大なる信任を得て、ロシア近代化

のための法制整備の中心的人物であったことは、すべての史書の指摘するところである<sup>(1)</sup>。と同時に、ロシア・フリーメイスンの歴史において、この時期の M.M. Сперанский 伯爵はきわめて大きな役割を果たしていたこともまた指摘しておかねばならない。すなわち、1810年には、自らのロッジを設立し、その理論的基盤として、ドイツより Johann von Boeber という高位のローゼンクロイツェルを招き寄せ、この方面できわめて熱心な活動を開始していたことが知られている<sup>(2)</sup>。そういったことが誘因となり、イルミナティとの噂がもつぱらとなり、やがて(1812年3月) Александр I に忌避され、シベリアへ流されたのであった(もっとも、戦後、再び中央政界に復帰する)。こういった事情については、トルストイは知らないはずはないのであるが、小説にはまったく反映されていない。ここに作者の作意を指摘しないわけにはいかない。つまり、M.M. Сперанский 失脚のドラマは、小説《Война и мир》の時間的範囲の内で生じた政治的重大事件であったにもかかわらず、トルストイはそれについては完全無視の姿勢をつらぬいており、歴史小説としては奇異の感を抑えることができない。

この M.M. Сперанский 伯爵に付き添って、政府の公式の活動においても、フリーメイスン関係の活動でも、その片腕になっていたのが、Михаил Леонтьевич Магницкий (1778—1855) であった。とりわけ、聖書協会での活動はよく知られている<sup>(3)</sup>。この人も M.M. Сперанский 伯爵の失脚に伴って追放されるのであるが、この間の事情についてはトルストイは十分に心得ていて、小説の中でもつねに M.M. Сперанский 伯爵と共に登場してきている。だが、さほど大きな存在としては形象化していない。この時期のフリーメイスンの実態を明らかにせんとすれば、M.Л. Магницкий の動きを逸するわけにはいかないのだが、ここでもトルストイは M.Л. Магницкий を故意に軽く描写していると言わざるをえない。

後に、Андрей 公爵はこれらの人物たちと自分との心理的な距離を感じ始め、彼らの人格に対して一種の不信感を抑えることができなくなっている。それがいかなる理由によるかは説明されていないけれども、政治的にも、またフリーメイスンの活動においても、理念によって生きる人々への本能的な嫌悪につながっていたと解釈できるであろう。自分が構築した領域が最高であると信じ込み、その枠の外での人間の動きに無関心な姿勢は、理想を求める人々が陥り易い側面だが、そういったことが Андрей 公爵の本能的な嫌悪感を誘発したと考えられる。政府高官 M.M. Сперанский 伯爵に限ったものではなく、フリーメイスンたち全般への嫌悪感へと拡大していることを指摘しておきたい。Андрей 公爵は自分がフリーメイスンであった(あるいはフリーメイスンである)が故に、その実感は根強いものであったとしなければならない。それは、Вилларский 伯爵に対しても同様で、トルストイのフリーメイスン観としてもこの点の指摘は重要であろう。

## 09. Александр Дмитриевич Балашов(1770—1837)

実在の人物で《Война и мир》に数多く登場する一人に、時の警察大臣 А.Д. Балашов がいる。この人物は、Александр I の寵臣として、もっぱら治安関係の要職にあった<sup>(1)</sup>。すなわち、1804—07年にはモスクワ警視総監、1809—10年にはペテルブルグ総督を勤め、1810年に警察大臣に就任した。この А.Д. Балашов がナポレオンのロシア侵入の第一報を、他の

重臣の耳を通り越して、直接皇帝の元に届ける。そして、ロシアに侵入したナポレオンの陣営を、使者として、訪れる。それらの有様は、小説ではかなり丹念に描写されていて(т. 3, ч. 1, III—VII)、彼に対する Александр I の信任がいかに大きかったかを示している。

この А.Д. Балашов がフリーメイソンであったことは多くの人によって確認されている。ペテルブルグの ложа Amis Reunis においては、かなりの高位にあった<sup>(2)</sup>。そして、警察大臣に就任するや、フリーメイソン組織に属する官吏を数多く手元に集め、集会での模様を定期的に報告させていたという<sup>(3)</sup>。

ここで断っておかねばならないが、この当時のロシアにおいては、フリーメイソンであることはけっして秘密事項ではなかった。フリーメイソンの集会での議事録や出席者の名簿は、当局に報告するのが慣例になっていた。したがって、今の場合、А.Д. Балашов 警察大臣がフリーメイソンの集りに出席したとしても奇妙なことではなかったのである。たとえば、後に Николай I の下で辣腕を振るった Ф.Бенкендорф なども、小説では言及されていないが、熱心なフリーメイソンであり<sup>(4)</sup>、そういったことは当時においてはまったくありきたりの現象であった。当局が目光らせていたのは、王政打倒を公言していたイルミナティと呼ばれる組織が浸透することであって、そういった嫌疑の人物の政治行動が問題にされ、それがフリーメイソンと深く関わっているとの理由で、やがて(1822年)禁止令となるのであるが、その場合でも、フリーメイソンたちの純粹の理論的討議は一部の人たちによって続けられていた。

Александр I 治下では、フリーメイソンの集会は一種の社交サロンの機能を果たしている場合が多く、トルストイはそういった社交的なフリーメイソンについてはほとんど無視し、わずかに Борис Друбецкой の描写にその一端をしのばせるにとどまっている。トルストイはこの当時のフリーメイソンの動きについてかなりの取捨選択を行っていると言わざるをえない。А.Д. Балашов についても、トルストイはフリーメイソンの側面を完全に削除し、Александр I の寵臣としての活動だけを追っている。そこには、トルストイが保持していたフリーメイソン観の特徴が色濃く反映している。自分の価値観の基準に入ってこない場合には、フリーメイソンの要素を故意に切り捨てているのである。

## 10. Адам Чарторыйский (Czartoryski) 公爵 (1770—1861)

ポーランド貴族として、Андрей 公爵の言葉によれば、

Это один из самых замечательнейших, но неприятнейших мне людей. (IX, 306)  
 であって、彼の憎悪の的になっている。この科白には裏があって、この人物が皇后 Елизавета Алексеевна の愛人であったことは、周知の事実であった<sup>(1)</sup>。そういった外国人がロシア民族の運命を決定することに Андрей 公爵の愛国心が素朴な意味での反発を覚えているのも当然であろう。興味があるのは、小説の中にこの人物が登場するとはいえ一言も科白を発しないし、とりたててその行動の描写があるわけでもない。政治的に見れば、Александр I の信任篤き重臣であるこの А. Чарторыйский 公爵の動きは、この時期のロシア国内政治においてきわめて重要で、この人物が小説の中で大きな対象となっても不思議ではない。しかし、この氏名を見たとき、ロシア人の心理の中に微妙な波紋を呼び起こさず

にはおこななかった。ずっと後(1830年)になって、ポーランド蜂起に際し、国民政府首班に祭り上げられ、反露運動の先頭にあったという事実は、小説《Война и мир》の発表当時、ロシア人にとってまだ記憶に新しいところであった。Александр Iの下でのロシア宮廷の複雑さを示すには格好の人物であるのだが、トルストイはあえてたんなる点景にとどめているのは、そういった感情のなせるわざであったと言える。

この時期の側近委員会(Негласный комитет)のメンバー4人の中で3人(А.Чарторыйский, В.П. Кочубей, Н.Н. Новосильцев)がフリーメイスンであったというが<sup>(2)</sup>、トルストイがこうした要素を斟酌した形跡はまったくないのは興味深い。ただ、Виктор Павлович Кочубей(1768-1834)だけは、Андрей公爵との懇意な関係が描写されている(т. 2, ч. 3, V)。そこでもВ.П.Кочубейはフリーメイスンとしてではなく、皇帝の側近としての活動だけが取り上げられている。事実、フリーメイスンとしてのВ.П.Кочубейの活動はほとんど知られておらず、政府当局の代表者としての顔の方だけがもっぱら後世に印象づけている。トルストイもまたその方向にしたがってこの人物を形象化していると言ってよいであろう。また、外相担当のН.Н. Новосильцев伯爵についても同様で、小説の中にはその氏名がわずかに出現するだけで(X, 159)、今の場合の論議の対象にはならないであろう。

## 11. 皇帝 Александр Павлович(1777-1825)

Александр I皇帝がフリーメイスンであったかどうか、いろいろと議論の余地のあるところで、公式の正史はまったくふれてはいないが、完全な肯定を与える研究者もいて、一説では、フリーメイスンの最高位を得ていたともされている<sup>(1)</sup>。いずれにせよナポレオン戦争の後のことで、小説《Война и мир》の場面にはかかわりはない。だが、Александр Iがフリーメイスンに対して同情的であったのは確かで、前世紀の禁止令の実質的な解除をおこない、この皇帝の下でフリーメイスンは黄金の時期を迎えることとなる。

ちなみに、当時の皇族の間にもフリーメイスン組織に属していた例をいくつか見ることができる。たとえば、小説の中でたびたび言及されている皇弟 Константин Павлович 大公(1779-1831)がフリーメイスンであったことは確実な事実とされている<sup>(2)</sup>。

また、皇太后 Мария Федоровнаの弟で、当時ロシア宮廷にあった Александр Фридрих Бюртембергский 侯(1771-1833)も、小説ではわずかに名前が出てくるだけだが(XI, 245)、ペテルブルグにおいて ложа の一つを主宰するほどの熱心なフリーメイスンであった<sup>(3)</sup>。しかし、これらの人々はいずれも既述のローゼンクロイツェルと結びついた Пьер とは無関係であって、小説の中での描写をトルストイは削除している。

## 12 Аббат Морно

小説《Война и мир》の冒頭、Анна Павловна Шерерのサロンの場面で、Пьерはイタリア人の аббат Морноを相手に熱心な議論をする(т. 1, ч. 1, III)。そして、この人物は、後にПьерのフリーメイスン入会の際に、その秘密の儀式に立ち会っている(X, 81)。これらのことから、この方面ではかなりの影響力を有する人物であることがうかがわれる。

Пьер の入会に当たっても、生活状況や性格などを予めフリーメイスンの側で綿密に調査し、その上で O.A. Баздеев が Пьер に接近したというのが、裏に隠された実際のシチュエーションであったと解釈すべきであろう。長老 O.A. Баздеев と Пьер との出会いはいままでの偶然ではない。

この氏名 Морио は架空のものだが、モデルの存在が指摘されている<sup>(1)</sup>。この実在の人物は、カソリックの僧職にあって、上述の A.Чарторыйский 公爵と連携して Александр I に大きな影響を与えたと言われている。小説では、この人物の実際の社会的な役割については、トルストイは何も触れていない。だが、カソリックという点を考えてみると、Элен が正教を捨ててカソリックに改宗する場面からもうかがえるように、19 世紀初めの Александр I の治下では、上層階級の間ではカソリックの影響は一定段階に達していたと想像されている。そういった要素を考えれば、むしろ Joseph de Maistre (1754–1821) の名前を上げないわけにはいかないであろう。この人物は、小説の決定稿では、名前が出てくるだけだが (XII, 167)、トルストイはプランの段階では J. de Maistre を大きく取り上げて論じようとの構想を持っていたようで、《Война и мир》構想の段階において、

Мнение Местра, что католич[еские] государи царствуют дольше. (XIII, 32)

と書きしるしているし、

J[oseph] M[aistre] (XIII, 611)

というメモも残っている。

J. de Maistre のロシア滞在 (1802–12 年) がロシア思想界に及ぼした影響については、若干の考察があるけれども、いまだ十全とは言えない<sup>(2)</sup>。何よりもまず、この人物がフリーメイスンの大物であった事実の指摘を欠かすことはできないであろう<sup>(3)</sup>。イタリアの小国を代表する駐露大使という身分ではなくて、世俗的な仮面の裏に隠れた実像は今日ではある程度明かにされていると言ってよいだろう<sup>(4)</sup>。トルストイはそのような J. de Maistre の実像に注目していたことは確かであって、たとえば、刊行されたばかりの J. de Maistre の著作<sup>(5)</sup> を利用したことが指摘されている (XVI, 144)。ところが、トルストイは J. de Maistre の存在をはっきりと意識していたにもかかわらず、結局は小説に組み入れることを止めてしまったのは何故であろうか。Пьер が加入したフリーメイスン組織はローゼンクロイツェル系のそれであり、その思想体系の祖述にトルストイの関心が集中していたため、J. de Maistre の思想の考察をあえて削除したとも考えられる。そのような処置の仕方に、トルストイの創作意図が濃厚に反映していると考えても、大きな誤りとはならないであろう。

### 13. モスクワ総督 Федор Васильевич Растопчин (Растопчин)伯爵 (1763–1828)

小説《Война и мир》の後半のハイライトは、ロシア軍のモスクワ撤退とフランス軍の進駐、そしてモスクワの大火であろうが、この場面の主人公はモスクワ総督 В.Ф. Растопчин 伯爵である。この時に彼が果たした役割については、1812 年戦役をめぐる数々の史書において大きく取り扱われているし、何よりもモスクワ大火の責任に対する彼自身の弁明には、

どの研究者も注目している。しかし、ここではФ.А. Растопчин 総督のフリーメイソン対策に問題をしばって考えたい。もともと18世紀以来モスクワはローゼンクロイツェル組織の強固な中心地であって、Н.И. Новиков 以下の有力なフリーメイソンたちがモスクワを根城に活動し、上層部にも有力な支持者を持ち、政治的影響力も大きかった。それ故、1810年にモスクワ総督に就任したФ.В. Растопчин 伯爵も、そういったフリーメイソン有力者との交流に配慮して、行政の円滑な運営をせざるをえなかった<sup>(1)</sup>。ところが、フランスとの外交関係が緊張し、ロシア国内にナショナリズムの雰囲気が増してくると、もともとフリーメイソンに強い反感と偏見を有していたФ.В. Растопчин 伯爵は、ロシア・フリーメイソンへのイルミナティの影響を指摘して、国家転覆をはかる不穏分子と断定してしまうようになった。たとえば、ナポレオンのロシア侵入の前年(1811年)に、Екатерина Павловна 内親王に提出したメモが残っているが<sup>(2)</sup>、そこでは мартинист という語を用いて18世紀以来のフリーメイソンたちを弾劾し、それらが反国家的陰謀を企むイルミナティと断定している。だが、同時代のフリーメイソンの実態についてはかならずしも完全に把握できていなかったらしく、長老的存在のО.А. Поздеев について некто Поздеев と言ったりしている。

ナポレオンのモスクワ進駐の前夜のモスクワ総督Ф.В. Растопчин 伯爵が、こういった極端な思い込みに包まれていたことを指摘しておかねばならない。このことが、やがてフリーメイソンの有力者でН.И. Новиков のもっとも親しい友人 Федор Петрович Ключарёв<sup>(3)</sup> (1754-1820) の逮捕・追放につながっていくのであるが、小説ではトルストイはこの事件を正面から取り上げないで、たんなるエピソードとして軽く言及しているだけである(XI, 279)。そのため、この時期の事情にうとい現代の読者は、モスクワ総督の反フリーメイソンの態度にはほとんど気付かないままであろう。また、Пьер がФ.В. Растопчин 総督に呼び出されて、フリーメイソンであることの確認を求められる場面についても(XI, 295-297)、現代でも時々実施される行政の予防的処置に似たものとして、さほど注意を払わない。その際、Пьер がКлючарёв 事件をすぐに連想し、総督の尋問に心理的な動揺を見せると同時に、かねてから懇意にしている総督とはいえ、彼の偏見を的確に予想して、心理的警戒心を高めている。

ちなみに、Ф.П. Ключарёв の子息 Андрей Федорович が、Пьер が属したと同じ ложа Ищущих Манны のメンバーであったことが知られているが<sup>(4)</sup>、この事実は小説とは無関係であろうか。

#### 14. その他

小説《Война и мир》に登場する実在の人物にあって、物語の進行にさほど重要な役割を担っているわけではなく、たんに背景の中の一つにすぎない扱いを受けている人物が多い。そのことがこの歴史小説のリアリティをさらに深いものにしてはいるのだが、その中にはフリーメイソンである人物が少なからず見受けられる。たとえば、ロシア軍の一隊を指揮する Александр Иванович Остерман-Толстой (1770-1857) はフリーメイソンとしてかなりの高位にあったが<sup>(1)</sup>、小説では勇敢な武将としての面だけが描かれている。また、ナポレオンの侵入を迎えて、Александр I がクレムリンにモスクワの人士を集め団結と支援を訴える

のを受けて、貴族地主は兵を差し出す。この際に、Матвей Александрович Дмитриев-Мамонов 伯爵 (1790-1863) は1個連隊を提供したとあって (т. 3, ч. 1, XXIII)、さりげない言及にとどまっている。この人物がモスクワでのフリーメイスン組織に属していたことが知られており、後年、悲劇的な最後を遂げた<sup>(2)</sup>ことは、トルストイもよく知っていたはずだが、登場人物としての肉付けは行っていない。

このような扱いを受けている実在の人物は他にも数多い。たとえば、Петр Степанович Валуев 伯爵<sup>(3)</sup>(1743-1814) (IX, 14, 16, 20; XII, 89)、Юрий Владимирович Долгоруков 公爵<sup>(4)</sup>(1740-1830) (X, 14-15, 20)、Александр Борисович Куракин 公爵<sup>(5)</sup>(1752-1818) (XI, 14-15, 23, 98)、Матвей Яковлевич Мудров<sup>(6)</sup>(1732-1809) (XI, 62) など、いずれも18世紀以来のフリーメイスンとしてよく知られ、この面では逸することのできない重要な名前であるが、後世の読者は何ら注目しない。だが、これらの人々の経歴はトルストイの知識の中では生きていたはずであり、これらの固有名詞の提示そのものに、作者はある意味を持たせていたと考えられる。たとえば、アウステリッツの戦いにおいて、Андрей 公爵と一緒に負傷しフランス軍の捕虜となった中であって、一人だけ Репнин 公爵の名前がわざわざ示されている (IX, 354-356)。この人は Николай Григорьевич Репнин 公爵 (1778-1833) とされている (XII, 471)。フリーメイスンに加入していたのだが<sup>(7)</sup>、この事実は小説《Война и мир》の読者には無関係であろうが、トルストイはフリーメイスンであることを熟知した上で、何気ない仕方でこの人物の名前を出していることを指摘しておきたい。

## 15. トルストイとフリーメイスン

トルストイが《Война и мир》を構想・執筆していた19世紀の60年代は、またロシア史学界においてフリーメイスン研究の出発点でもあったことを忘れてはならない<sup>(1)</sup>。既述の И.В. Лопухин の手記なども公刊され、ロシア・フリーメイスンの実態が急速に解明されていった時期であった。トルストイがこの歴史小説で扱っている1805-12年とは、復活したフリーメイスン結社の活動がようやく全盛期を迎えようとしていた時期に他ならなかった。しかるに、トルストイにとっては、史学的な研究も関連資料もいまだ不完全であり、自らの手によって19世紀フリーメイスンを再発見せねばならなかった。すなわち、1866年11月、トルストイは Ясная поляна よりモスクワに出て、Румянцев 博物館を訪れ、フリーメイスン関係の資料を閲覧、ひじょうな感銘を受けている (LXXXIII, 129-130)。その詳細は不明だが、後に刊行されたフリーメイスン関係所蔵目録<sup>(2)</sup>によって、トルストイが目にしたと思われる資料の大要を知ることができる。О.А. Поздеев 以下の М.Ю. Виельгорский、С.С. Ланской などのローゼンクロイツェル関係者の演説草稿や書簡が数多く保存されており、その閲覧が小説《Война и мир》の創作過程に強く反映したと想像されるのである。

トルストイとフリーメイスンとの関わりについては、別の機会に論ずることとして、ここでは Benjamin Franklin への関心を指摘するにとどめておく。トルストイは若い頃から B. Franklin の倫理的な生活に強く惹かれ、その人格への傾倒が長く続いたことは、よく知られている。小説《Война и мир》にフリーメイスンを登場させたのも、たんに19世紀初

頭の社会現象として取り上げたというにとどまらないであろう。アメリカ独立のために活動した多くの人々がフリーメイソンであり、その中心的人物が B. Franklin であったことは<sup>(3)</sup>、トルストイとしては熟知していたはずである。

— 注 —

- 01-1 O.A. Поздеев の伝記的事実については、*Русский биографический словарь. Плавильщиков—Примо*. СПб., 1905, стр. 263-265 による。
- 2 たとえば、Кандиев, Б.И., *Роман-эпопея Л.Н.Толстого 《Война и мир》. Комментарий*. М., 1967, стр. 136.
- 3 *Литературное наследство*. Т. 94. *Первая законченная редакция романа 《Война и мир》*. М., 1983, стр. 382.
- 4 Пыпин, А.Н., *Русское масонство. XVIII и первая четверть XIX в.* Пг., 1917, стр. 258-262.
- 5 Западов, А., *Новиков*. М., 1968, стр. 175-188.
- 6 *Русский биографический словарь. Плавильщиков —Примо*. СПб., 1905, стр. 263.
- 7 Земенков, Б.С., *Памятные места Москвы*. М., 1959, стр. 177.
- 02-1 笠間啓治「トルストイ『戦争と平和』のピエールのモデルについて」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第28輯、1982年、81-91頁。
- 2 Пыпин, А.Н., *Русское масонство. XVIII и первая четверть XIX в.* Пг., 1917, стр. 528.
- 3 *Литературное наследство*. Т. 94. *Первая законченная редакция романа 《Война и мир》*. М., 1983, стр. 387.
- 4 Соколовская, Т., “Русское масонство и его обряды. Ложа Северной Звезды в Вологде,” *Русский архив*, 1906, кн. II, стр. 114-125.
- 5 Бочаров, С., “Мир в 《Войне и мире》,” *Вопросы литературы*, 1970, No. 8, стр. 78.
- 03-1 湯浅慎一『フリーメイソンリー、その思想、人物、歴史』(中公新書)、中央公論社、1990年、55-58頁。
- 2 Торчкова, Н., “К вопросу прототипа образа князя Андрея,”—В кн.: *Лев Николаевич Толстой. Сборник статей о творчестве*. Т. 2. Под ред. Н.К. Гузия. М., 1959, стр. 76.
- 3 Михайловский-Данилевский, А.И., *Описание Отечественной войны в 1812 г.* СПб., 1839.
- 4 Семевский, В., “Декабристы-масоны,” *Минувшие годы*, 1908, No. 3, стр. 135, 137.
- 04-1 Бакунина, Т.А., *Знаменитые русские масоны*. Париж, 1935, стр. 13-18; 40-44.
- 05-1 *Русский биографический словарь. Лабзина —Лященко*. СПб., 1914, стр. 650

- 682.
- 2 Лопухин, И.В., *Записки*. М., 1860. なお、XVI, 142 で Н.В. Лопухин としているのは誤り。
  - 3 Лопухин, И.В., *Рассуждение о злоупотреблении разума некоторыми новыми писателями*. М., 1780.  
Его же, *Излияние сердца.....*М., 1794.  
Его же, *Некоторые черты о внутренней церкви.....*М., 1798.  
Его же, *Замечание на известную книгу Руссову di Contrat Social*. М., 1805.
  - 4 Милюков, П., *Очерки по истории русской культуры*. Ч. 3, вып. 2. Изд. 3-е. Спб., 1913, стр. 342.
  - 5 赤間剛『フリーメイソンの秘密』(三一書房、1983年、123頁)によれば、現在の結社では、世界の一万人の著名なフリーメイソンの一人にトルストイを数えているという。
- 06-1 フリーメイソンとしての М.Ю. Виельгорский 伯爵の経歴については、Соколовская, Т., *Капитул Феникса. Высшее тайное масонское правление в России (1778-1822 гг.)*. Пг., 1916, стр. 60-62 による。
- 2 Соколовская, Т., *Масонство, как положительное движение русской мысли в начале XIX века*. Спб., 1904, стр. 19.
  - 3 Соколовская, Т., “Из истории масонской ложи Палестины,” *Русская старина*, 1907, т. 132, стр. 83-86.
  - 4 1-й наместный мастер が М.Ю. Виельгорский 伯爵で、2-й наместный мастер が С. С. Ланской であつた。
  - 5 Соколовская, Т., *Капитул Феникса*. Пг., 1916, стр. 69.
  - 6 Соколовская, Т., “К масонской деятельности кн. Баратаева,” *Русская старина*, 1909, т. 135, февраль, стр. 639.
  - 7 Щербакова, Т., *Михаил и Матвей Виельгорские. Исполнители. Просветители. Меценаты*. М., 1990, стр. 15.
- 07-1 Соколовская, Т., *Раннее Александровское масонство.— Масонство в его прошлом и настоящем*. Т. 2. М., стр. 194.
- 08-1 *Советская историческая энциклопедия*. Т. 13. М., 1971. стр. 747 は、そういった面の記載のみで、フリーメイソンとしての活動には、まったく触れていない。
- 2 Бакунина, Т.А., *Знаменитые русские масоны*. Париж, 1935, стр. 71-76.
  - 3 Пыпин, А.Н., *Религиозные движения при Александре I*. Пг., 1916, стр. 21-26.
- 09-1 *Русский биографический словарь*. Т. II. М.-Спб., 1900, стр. 442-444.
- 2 Пыпин, А.Н., *Русское масонство. XVIII и первая четверть XIX в.* Пг., 1916, стр. 386, 388.
  - 3 Соколовская, Т., “Из материалов по истории масонства,” *Русская старина*, 1907, т. 129, стр. 344.

- 10-1 *Рассказы о Пушкине, записанные со слов его друзей П.И. Бартевым в 1851-1860 годах.* М., 1925, стр. 138.  
 2 Бакунина, Т.А., *Знаменитые русские масоны.* Париж, 1935, стр. 78.
- 11-1 Бакунина, Т.А., *Знаменитые русские масоны.* Париж, 1935, стр. 77-81.  
 2 Пыпин, А.Н., *Русское масонство. XVIII и первая четверть XIX в.* Пг., 1916, стр. 553-554.  
 3 Там же, стр. 386.
- 12-1 Сказкин, С.Д., “Некоторые новые данные об одном из персонажей 《Войны и мира》 Л.Н.Толстого,” *Вопросы истории*, 1962, No. 9, стр. 199-201.  
 2 Карсавин, Л.П., “Жозев де Местр,” *Вопросы философии*, 1989, No. 3, стр. 93-118.  
 3 リュック・ブノワ『秘儀伝授』(文庫クセジュ)、白水社、1975年、133-134頁。  
 4 J. de Maistre とフリーメイソンとの関係については、Бердяев, Н., *Жозеф Местр и масонство* (1926) がある。  
 5 de Maistre, J., *Mémoires politiques et correspondance diplomatique.* Paris, 1859; *Correspondance diplomatique 1811-1817.* Paris, 1860-61.
- 13-1 Мельгунов, С., “Ростопчин и масоны,” В кн.: Мельгунов, С., *Дела и люди александровского времени.* Т. 1. Берлин, 1923, стр. 187-189.  
 2 “Записка о мартинистах, представленная в 1811 году графом Ростопчиным великой княгине Екатерине Павловне,” *Русский архив*, 1875, кн. 3, стр. 75-81.  
 3 *Русский биографический словарь. Ибак — Ключаров.* М.-Спб., 1897, стр. 755-756.  
 4 Соколовская, Т., “Из переписки масонов о 14 декабря 1825 г.,” *Голос минувшего*, 1915, No. 12, стр. 244.
- 14-1 Пыпин, А.Н., *Русское масонство. XVIII и первая четверть XIX в.* Пг., 1916, стр. 386-387.  
 2 笠間啓治『散策のモスクワ』(ナウカ社、1992年、119-125頁)にて詳述した。  
 3 Вернадский, Г.В., *Русское масонство в царствование Екатерины II.* Пг., 1917, стр. 219.  
 4 Ешевский, С., “Московские масоны восьмидесятых годов прошедшего столетия (1780-1789),” *Русский вестник*, 1865, No. 3, стр. 36.  
 5 Вернадский, Г.В., *Русское масонство в царствование Екатерины II.* Пг., 1917, стр. 275.  
 6 Соколовская, Т., *Русское масонство и его значение в истории общественного движения.* Спб., 1906, стр. 127.  
 7 Семевский, В., “Декабристы-масоны,” *Минувшие годы*, 1908, No. 3, стр. 153.
- 15-1 50年代末からロシア史学界では18世紀フリーメイソン研究が起きてきた。なかでも、М.Н. Лонгинов、С.В. Ешевскийの論説がその先鞭であった。たとえば、Лонгинов, М.Н., *Новиков и Шварц. Материалы для истории русской*

*литературы в конце XVIII века.* М., 1857.

Ешевский, С.В., “Несколько дополнительных замечаний к статье Новиков и Шварц М.Н. Лонгинова,” *Русский вестник*, 1857, XXI, стр. 174-201.

Лонгинов, М.Н., “Новые подробности для биографии Новикова и Шварца,” *Русский вестник*, 1858, стр. 440-463.

Лонгинов, М.Н., “Новые подробности по делу Новикова и прочих мартинистов,” *Русский вестник*, 1859, XXII, стр. 358-386.

さらに、60年代以後、ロシア・フリーメイソン研究は史学界の中心的テーマの一つとなり、多くの論文・著書が出たことは、よく知られている通りである。

- 2 *Каталог масонских рукописей Московского публичного и Румянцовского музеев.* М., 1900.
- 3 吉村正和『フリーメイソン、西欧神秘主義の変容』（講談社現代新書）、講談社、1989年、135-141頁。

## Русские масоны в романе Л.Н. Толстого “Война и мир”

### Кэйдзи КАСАМА

Роман Л.Н. Толстого “Война и мир” (1863–69) описывает исторические события, потрясшие русское общество 1805–1812 гг., и вместе с тем рассказывает о душевных переживаниях и духовных исканиях русской интеллигенции в условиях этих исторических коллизий. Главный герой романа Пьер Безухов, стремясь избавиться от страданий, в качестве первого шага к этому обращается к деятельности масонов. В масонском братстве происходит значительный духовный рост Пьера. Этот процесс является одной из главных сюжетных линий романа “Война и мир.”

На начало XIX века в России как раз и приходится период наивысшей активизации деятельности масонов. Масонство было не только модным веянием времени, но и явилось одной из высших точек развития русской мысли после XVIII века. Это мистическое течение, особенность которого заключалась в поиске интуитивной истины на основе откровения, хотя и породило много ложного, сильно притягивало русскую интеллигенцию.

При трактовке романа “Война и мир” нельзя игнорировать масонские эпизоды романа. Закономерно, что Л.Н.Толстой приложил немало усилий, стремясь описать действительное положение вещей в масонстве.

Однако до настоящего времени при исследовании романа “Война и мир,” масонство почти всегда рассматривалось как достаточно второстепенное явление, а подчас даже полностью исключался из числа объектов исследования. Несмотря на то, что начиная с середины прошлого века, книжные полки изобиловали историческими исследованиями масонства, при изучении романа “Война и мир,” в котором описывается русское общество начала XIX века, сильна тенденция свести элемент масонства к сугубо личной проблеме духовного роста главного героя Пьера Безухова.

Для того, чтобы восполнить этот пробел, о котором мы говорили выше, представляется необходимым, прежде всего, выявить объективные фактические связи и установить, кто из персонажей романа “Война и мир” в действительности являлся масоном. Это послужит не только ключом к пониманию картины нравов, но, вероятно, явится своего рода предварительной работой, позволяющей выявить сокрытые идейные течения, содержащиеся в романе.

Изучение масонства является насущно необходимым как для понимания ситуации, сложившейся в российском обществе начала XIX века, так и для раскрытия творческого замысла Толстого. Несомненно, что это изучение поможет определить некоторые источники самобытного учения, учения, называемого толстовством.